

『太平御覧』「画」訳注

宇佐美 文 理

この小稿は、『太平御覧』巻七百五十「画」の訳注である。『太平御覧』の絵画に関わる部分は、巻七百五十の途中から始まる「画」と巻七百五十一全体を占める「画下」の部分とからなり、小稿はそのうち巻七百五十の部分の訳注である。

『太平御覧』全体の性格についてはここに贅言するまでもないと思われるが、(『太平御覧引得』聶崇岐序(1934・北京)、郭伯恭『宋四大書考』(1940・長沙)、胡道静『中国古代的類書』(1982・北京)等参照)ここにその訳注を行うのには、二つの意味がある。

ひとつは、「無名画工」の記事の問題である。唐以前の絵画史に関する資料としては、既に唐の張彦遠『歴代名画記』があり、絵画史研究に不可欠の資料を提供している。そして張彦遠以前の絵画史に関する記述は『歴代名画記』にはほぼ尽くされている、と言って基本的には正しいであろう。しかしながら、『太平御覧』「画」のすべて六十条の内、『歴代名画記』にそのまま載せるものは十七条のみ。『歴代名画記』が部分的な引用をしている条を含めても二十九条にしかない。つまり、残りの三十一条は、『歴代名画記』がまったく触れていない記事なのである。(『太平御覧』は、張彦遠以後の編纂物ではあるが、巻七百五十「画」に載せる記事は、すべて張彦遠以前のものに限られている。)この状況を作り出した理由の内、はっきりしているのは、次の構造である。即ち張彦遠は、巻一から巻三において、絵画史に関わる問題を、各巻五項目、都合十五に分類して論述を行い、次に巻四から巻十にいたるまでを画人伝とした。つまり、巻四以下は、「名ある」画人の記事のみで、名もない画工に関する記事は、載るならば巻三以上ということになる。その際、張彦遠がいわば「絵画概論」を説く際に、不必要と思われた記事は、当然の如く切り捨てられている。この『歴代名画記』の編制上の理由から載せられなかった「無名画工」の記事の整理、これが第一の要素である。(現代の編纂書、例えば陳伝席『六朝画家史料』陳高華『隋唐画家史料』(1990, 1987・北京)も代表的な画家の伝記史料について網羅的な資料集を目指したものと思われるが、当然の如く「無名画家」の記事は載っていない。)ただし、『太平御覧』が無名画工の記事を網羅しているかと言えば、実はそうではない。これは『太平御覧』が直接書籍の山から収集せず、前代の類書を利用したことが大きな理由になっていることは言うまでもない。唐以前の絵画史関連の記事を集成するためには、さらなる搜覧が必要となるが、それには別稿を準備する。

もう一点は、『太平御覧』全体の構成に関わる問題である。冒頭に示した『太平御覧』の概論は、確かに概観を与えてくれるが、『太平御覧』の編成についての詳細な研究はまだ進行中であり、不明な点は数多い。(森鹿三氏の「修文殿御覧について」(『東方学報』京都第三十六冊)ならびに勝村哲也氏の類書に関わる一連の論考、特に「修文殿御覧天部の復元」(『中国の科学と科学者』(1978・京都)所収)を参照)この問題を考える上で、『太平御覧』画部はその特殊な例であるが故に、ある解明の糸口を与えるものと思われる。それは、

絵画記事においては既に『歴代名画記』という「絵画百科全書」が存在し、『太平御覧』画部はそれをベースに作られたことが明白であり（画下はすべて『歴代名画記』と『画断』即ち『唐朝名画録』の記事で占められている）、『太平御覧』と『歴代名画記』の関係を考察することにより、『太平御覧』の編者が持っていた資料の中身と、その編纂の手法とに、いささかの光を当てることができると思われる。これには『歴代名画記』のみならず、『藝文類聚』などの他の現存類書群を視野に入れた考察が必要となるが、こちらにも別稿を準備している。

『太平御覧』のテキストには、所謂四部叢刊三編本を用いる。この巻七百五十の部分は、南宋蜀刊本である。他に日本安政二年活字印本（活字本と略す）、嘉慶十四年張海鵬刊本（張本）、嘉慶十二年鮑崇城刊本（鮑本）を用いて校勘した（静嘉堂本宋版は巻七百五十は欠巻部分）。原文の文字を改めることはせず、必要に応じて訳文中において改めた。なお玄元等の避諱にかかるものは示さない。他書との校勘は原則的に引用元の原典との校記のみを示す。また校勘記の前に、対応する現存文献をまず先に示した（所謂正史には中華書局標点本の頁数を示す）。なお原文内の〈〉の部分は原注である。語釈は最小限にとどめた。書き下し文もつけない。スペースの制約上の措置である。

* * *

画

画。

『太平御覧』の他部では、「上下」で分ける場合には、「上」の部分には「某上」と記されている部分もある。

积名曰、画挂也、以五色挂物上也

积名に言う、「画」とは「挂」である。五色を物の上に掛けるのである。

『积名』积書契。なお、畢沅は『积名疏証』において本文を「画絵也、以五色絵物象也」と改め、次のように注する。「今本作画挂也以五色挂物上也。拠太平御覧引改挂為絵、拠広韻引改上作象。攷工記曰、画絵之事、雜五色」。ここに「御覧引」という部分は目睹した御覧諸本とは合わない。「広韻引」は去声十五卦。攷工記は『太平御覧』の次段を参照。なお、「画挂也」とするのは、易との関係が念頭にある。『周易』説卦伝に「易六画而成卦」、『乾鑿度』に「卦者掛也、掛万物、視而見之」とあり、乾卦「元亨利貞」の疏は易緯の「卦者掛也」を引いて「言鼎掛物象以示於人、故謂之卦」と注する。なおこの『积名』の文は『歴代名画記』では「叙画之源流」に引用されている。

周礼曰、画纁之事、雜五色、東方謂之青、南方謂之赤、西方謂之白、北方謂之黒、天謂之玄、地謂之黄、青与白相次也、赤与黒相次也、玄与黄相次也、＜此言画纁六色所象及布彩之彩

第>凡画績之事、後素功<素白綵也、後布之、為其功易以潰汚之也>

周礼に言う、絵画は、五色をまじえ用いる。東方は青、南方は赤、西方は白、北方は黒、天は玄、地は黄色である。青は白と相次ぎ、赤は黒と相次ぎ、玄は黄と相次ぐ。(鄭玄注：これは、絵画の六色の象徴するものと、色をつける際の順番について言うのである) およそ絵画は、白をあとまわしにする。(鄭玄注：素とは白い彩りである。この色は後からつける。(白を先に施すと) 他の色によって白色が汚されやすいからである)

『周礼』考工記画績。布彩之彩第活字本作布彩之次第、張本鮑本作布采之第次、本文素功張本作素工、注綵鮑本作彩張本作采、功易張本無功字。潰活字本作潰。阮元本周礼布彩之彩第作布采之第次、注綵作采、汚作汙。

論語曰、絵事後素

論語に言う、絵は白を後にするものだ。

『論語』八佾。全段は「子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以為絢兮。何謂也。子曰、絵事後素。曰、礼後乎。子曰、起予者商也。始可与言詩已矣」。その集解に「鄭玄曰、絵、画文也。凡画絵先布衆采、然後以素分其間、以成其文、喻美女雖有倩盼美質、亦須礼以成也」。

史記曰、武帝衛太子廢後、上居甘泉宮、召画周公負成王図、於是左右群臣知上意欲立少子也<少子即昭帝也>

史記に言う、武帝の衛太子劉據が廃された後、武帝は甘泉宮にあって、(画工を) 召して「周公が成王を背負う図」を描かせた。そこで左右の群臣達は、武帝が少子昭帝を立てようと思っていることをさとしたのである。(少子とは他ならぬ昭帝のこと)

『史記』外戚世家(1985)。なお、褚少孫が補ったとされる部分である。史記廢後下有未復立太子、而燕王旦上書、願歸国入宿衛、武帝怒、立斬其使者於北闕二十八字。召画下有工図画三字、成王図作成王也、知上作知武帝。なお、このときの事情は、『漢書』霍光伝に詳しい(2932)。「征和二年、衛太子為江充所敗、而燕王旦広陵王胥皆多過失。是時上年老、寵姬鉤弋趙婕妤有男、上心欲以為嗣、命大臣輔之。察群臣唯光任大重、可属社稷。上乃使黃門画者画周公負成王朝諸侯以賜光。後元二年春、上游五柞宮、病篤、光涕泣問曰、如有不諱、誰當嗣者。上曰、君未諭前画意邪。立少子、君行周公之事。光頓首讓曰、臣不如金日磾。日磾亦曰、臣外国人、不如光。上以光為大司馬大將軍、日磾為車騎將軍、及太僕上官桀為左將軍、搜粟都尉桑弘羊為御史大夫、皆拜臥内牀下、受遺詔輔少主。明日、武帝崩、太子襲尊号、是為孝昭皇帝。帝年八歲、政事壺決於光」。「甘泉宮」は、『史記』孝武本紀(458)に「又作甘泉宮、中為臺室、画天地泰一諸神、而置祭具以致天神」。

又曰、甘露三年、单于始入朝、宣帝思服肱之美、画其人於麒麟閣、法其状貌、署官爵姓名

また言う、甘露三年、单于が始めて入朝し、宣帝は功臣達の功績を思い、彼らの肖像を麒麟閣に描かせ、その人の容貌に従って描き分け、それぞれ官爵姓名を署した。

「又曰」とあるが、『史記』には見えない。『漢書』蘇武伝（2468）の文である。或いは御覧の編者（抄出者）が、この条の前にあった「漢書曰」という条を抄出時にとばした結果であろう。底本股作服誤。他本正作股。今訳文従漢書改。漢書宣帝作上、状貌作形貌、署下有其字。「麒麟閣」は、師古注引張晏曰「武帝獲麒麟時作此閣、图画其象於閣、遂以為名」。なお『歷代名画記』叙画之興廢「有烈有勲、皆登於麟閣」参照。『藝文類聚』画所引。

又曰、李夫人早卒、帝图画其形於甘泉宮

また言う、李夫人は若くして亡くなり、武帝はその姿を甘泉宮に描かせた。

『漢書』外戚伝（3951）。漢書早卒作少而蚤卒、卒下有上憐閔焉四字。『藝文類聚』卷三十二閨情、『初学記』卷十妃嬪所引。

又曰、金日磾母教誨兩子、甚有法度。武帝聞而嘉之、病死、詔図於甘泉宮、曰休屠王閼氏、日磾每見画常拜、向之涕泣

また言う、金日磾の母は、二人の子供を非常にきちんと教え育てた。武帝はそれを耳にして、これをほめた。（その母が）病死すると、詔を下して甘泉宮にその像を描かせ、「休屠王閼氏」と題した。日磾は、その絵を見ては必ず拝礼を行い、これに向かって涙するのであった。

『漢書』金日磾伝（2960）。漢書武帝作上、詔図下有画字、曰休上有署字、向之作郷之。師古注郷讀曰嚮。涕泣下有然後乃去四字。「休屠王」としたのは、金日磾がもと匈奴の休屠王の太子であったことによる。なお『論衡』乱龍篇は、この話に続けて「夫图画、非母之実身也。因見形象、涕泣輒下、思親気惑、不待実然也。夫土龍猶甘泉之图画也。雲雨見之、何為不動」として、土龍が雨を呼べることの論証に使っている。『太平御覧』卷四百十二孝上『藝文類聚』画、又卷二十孝所引。

東觀漢記曰、馬援還、誠兄子曰、画虎不成反類狗也

東觀漢記に言う、馬援はもどると、兄の子を戒めて言った。虎を描こうとしてうまくいかず、かえって狗のようになってしまう（ようになってはいけない）と。

この話はもとの『東觀漢記』では、『太平御覧』卷九百十九の「東觀漢記曰、馬援与兄子嚴敦書云、学龐伯高不就、猶為謹勅士、所謂刻鵠不成、尚類鶩者」とセットになっていたはず

である。范曄『後漢書』馬援伝では(845)これとセットにして記述して「効伯高不得、猶為謹勅之士、所謂刻鵠不成、尚類鶩者也。效季良不得、陷為天下輕薄子、所謂画虎不成、反類狗者也」とする。また『後漢書』孔僖伝(2560)「因読吳王夫差時事、僖廢書歎曰、若是、所謂画龍不成、反為狗者」の如く、虎ではなく「画龍」で句を作るものもある。『歴代名画記』「叙画之興廃」には「嗟乎、今之人、衆藝鮮至、此道尤衰、未曾誤点為蠅、惟見無成類狗」として引かれている。また「誠兄子書」として『藝文類聚』卷二十三鑑戒所引。なお、「虎を描く」ことには特別な意味がある。『風俗通』祀典「県官常以臘除夕、飾桃人、垂葦茱、画虎於門、皆追效於前事、冀以衛凶也」『論衡』乱龍篇「県官斬桃為人、立之戸側、画虎之形、著之門闌」。

又曰、宋弘嘗讌見、御座新施屏風、図画列女、世祖数顧視之、弘曰、未見好徳如色者、帝撤之

また言う、宋弘がかつて燕見した際、光武帝の居所に新しく屏風が置かれてあり、古の列女が描かれていた。光武帝はしばしば振り返ってこの屏風を見ていた。宋弘が、「未だ徳を好むこと色の如くする者を見ず」と言うと、光武帝はこの屏風を取り払った。

他本色字上有好字。「列女」に関して、書物では劉向撰とされる『古列女伝』が有名だが、六朝期に盛んに作られた列女図はこの光武帝のものがその早い例と思われる。なお所謂正史に「列女伝」が設けられるのは『後漢書』以降のこと。「未見好徳如色者」は『論語』子罕篇。「鑑戒」の存在であるべき「列女図」を光武帝が「鑑賞」しているというこの対比は、絵画の存在意義の変遷を考える上で注目すべき条。そして引用部に続くのが、有名な「糟糠之妻」の逸話。いま『太平御覧』卷七百一の引用を示す。「東観漢記曰、宋弘嘗燕見、御座新施屏風、図画列女、帝数顧視之。弘正容言曰、未見好徳如色者。上即為撤之。上姉湖陽公主新寡、上与共論朝臣、微觀其意。主曰、宋公威容徳器、群臣莫及。上曰、方図之。後弘見上、令主坐屏風後、因謂弘曰、諺言貴易交、富易妻、人情乎。弘曰、臣聞貧賤之交不可忘、糟糠之妻不下堂。上顧謂主曰、事不諧矣。また『藝文類聚』卷六十九屏風所引。さらに范曄『後漢書』宋弘伝(903)にもほぼ同じ文章が見えるが、「新施屏風」の「施」字が無く、「上即為撤之(范書は「帝即為徹之」に作る)」のあとに「笑謂弘曰、聞義則服、可乎。対曰、陛下進徳、臣不勝其喜」の一節がある。

范曄後漢書曰、光和元年、置酒鴻都門、画孔子及七十二弟子之像

范曄の後漢書に言う、光和元年、鴻都門で酒宴を設け、孔子及び七十二弟子の像を描いた。

『後漢書』蔡邕伝(1998)。今本蔡邕伝置酒鴻都門作遂置鴻都門学。鴻都門については、既に『後漢書』陽球伝(2499)に、鴻都文学の楽松らが自分たちの肖像画を描かせようとしたことをやめさせようとした、陽球の上奏文がある。のち光和元年に鴻都門に学生をおいたことは、『後漢書』孝靈帝紀(340)に見える。また『歴代名画記』は、「叙画之興廃」で「漢

武創置秘閣、以聚図画。漢明雅好丹青、別開画室、又創立鴻都學以集奇藝、天下之藝雲集」としており、鴻都門學に「えかき」も集まったかの如く記している。さらに『歴代名画記』述古之秘画珍図には「古之秘画珍図固多、散逸人間、不得見之、今粗拳領袖、則有……」として「鴻都門図孔聖七十」を挙げている。

又曰、明帝遣使天竺、問仏道法、遂於中国図画形像焉

また言う、明帝は使いを天竺に遣わし、仏道の法を学ばせ、そのまま中国において形像を描かせた。

『後漢書』西域伝（2922）。有名な仏教伝来関係の記事。范曄に基づいたのは、袁宏『後漢紀』明帝紀永平十三年に「初……」として掲げられる「於是遣使天竺、而問其道術、遂於中国而図其形像焉」。（范曄『後漢書』楚王英伝（1428）李賢注、また『資治通鑑』永平八年の胡三省注引く『漢紀』による。現行本『後漢紀』は「於是遣使天竺」を欠く。なお李賢注は「於中国」を欠く）なお、明帝期の仏教初伝の記事が諸々の文献に現れるのは周知に属そう。さらに「遂於中国図画形像」についても「牟子理惑論」などに、より詳しい記述がある。『歴代名画記』は、巻五に「彦遠曰、漢明帝夢金人長大、頂有光明、以問群臣。或曰、西方有神、名曰仏、長丈六、黄金色。帝乃使蔡邕取天竺国優瑱王画釈迦倚像、命工人図於南宮清凉臺及顯節陵上。以形制古朴、未足瞻敬。阿育王像至今亦有存者可見矣」と記録している。『藝文類聚』巻七十六内典所引。

又曰、顯宗図画建武中名臣列將於雲臺、以椒房故、＜謂馬后＞独不及馬援、東平王蒼觀画、言於帝曰、何故不画伏波像、帝笑而不言

また言う、明帝は建武期の名臣列將を雲臺に描いたが、外戚であったので（馬援の娘の馬后を言う）、馬援は描かなかった。東平王劉蒼が、明帝に「どうして伏波將軍馬援を描かないのですか」というと、明帝は笑って何も言わなかった。

『後漢書』馬援伝（851）。後漢書馬援無馬字、伏波像作伏波將軍像。描かれた名臣二十八將の名は『後漢書』列伝十二の論（789）に見える。『藝文類聚』画所引。

又曰、陳紀字元方、父憂、殆將滅性、豫州刺史嘉其至行、上書画像百城以厲俗

また言う、陳紀、字は元方は、父が亡くなって喪に服し、その嘆くことが激しいので、体をこわして死んでしまうのではないかというぐらいであった。豫州の刺史はその立派な行いをほめたたえ、上書して百ある町に彼の肖像を描かせて、風俗を鼓舞しようとした。

『後漢書』陳紀伝（2067）。いま「遭父憂、每哀至、輒歐血絶氣、雖衰服已除、而積毀消瘠、殆將滅性、豫州刺史嘉其至行、表上尚書、図象百城、以厲風俗」に作る。また邯鄲淳に「後

漢鴻臚陳君碑」があり、この話を載せている。「及太丘君疾病終亡、喪過乎哀、崩傷嘔血、如此者數焉、服礼既除、戚容弥甚、聞名心嚮、言及隕涕、雖大舜之終慕、曾參之自尽、無以踰也、豫州刺史嘉懿至德、命敕百城、図画形象」（『古文苑』卷十九）。また、陳紀の弟譙の伝の李賢注（『後漢書』（2069））に「先賢行狀曰、豫州百城、皆図画寔紀譙形像焉」と見える。『太平御覧』卷四百十三孝中には『海内先賢伝』として引用している。喪における「滅性」をいさめるのは『孝経』喪親章「毀不滅性」。

魏書曰、曹休祖父嘗為吳郡太守、休見壁上祖父画、下榻、拜而涕泣

魏書にいう、曹休の祖父はかつて吳郡の太守であった。休は壁に描かれた祖父の絵を見て、こしかけからおりて拝礼し、涙を流した。

いま『三国志』魏書曹休伝裴松之注（280）に『魏書』として引かれる文が見える。裴注太守下有休於太守舎五字、涕泣下有同座者皆嘉歎焉七字。

魏氏春秋曰、徐邈善画、作走水獺標於水濱、群獺集焉

魏氏春秋に言う、徐邈は絵がうまく、ボラの絵を描いて水辺においたら、獺がたくさん集まってきた。

以下の『統齊諧記』の条を参照。この話は獺が好む「鯪魚」をどこかに登場させないと、話がつながらない。しばらく『統齊諧記』に従い、上記の如く訳した。なお『冊府元龜』図画部の引用は、この部分と同じで、この後に「邈位至司空」と続ける。『冊府元龜』が引用文の後に、主人公の官職を記すのは、この書物が「君臣事迹」だからである。他本標作標。

晋書曰、顧愷之尤善丹青、謝安深重之、為有蒼生已來未之有也、愷之每画人成、數年不点目睛、人問其故、答曰、四体妍蚩本無關於妙處、伝神写照、正在阿堵物中、嘗悦一隣女、挑之弗從、廼図其形於壁、以棘針釘其心、女遂患心痛、愷之因致其情、女從之、遂密、每重嵇康四言詩、因為之図、常云手揮五弦易、目送歸鴻難、每写人形、妙絶於時、嘗図裴楷像、頰上加三毛、觀者覺神明殊勝、又為謝鯤像、在石巖裏、云、此子宜著丘壑中、欲図殷仲堪、堪有目疾、固辭、愷之曰、明府正為眼耳、若明点瞳子、飛白拂上、使如輕雲之蔽月、豈不美乎、顧愷之嘗以一厨画、糊題其前、寄桓玄所、皆其深所珍者、玄乃発其厨後、竊取画、而緘閉如旧、以還之、給云未開、愷之見封題如初、但失其画、直云妙画通靈、変化而去、亦猶人之登仙、了無恠色

晋書に言う、顧愷之は絵画が得意だった。謝安は彼のことを重視し「開闢以来彼の如き人はいない」とした。顧愷之はいつも人物画を描くと、できあがってから数年間、瞳を描き入れないので、ある人がその理由を問うた。すると彼が言うには「四肢の美醜は、もともと絵画のすばらしさとはかかわりのないもの。そのひとの心と姿を写し出す、その要所はそこにこ

そあるのだ」と。また、顧愷之が隣のむすめをすきになったことがあった。手を出そうとするがうんといってもらえない。そこでそのむすめの姿を壁に描き、いばらのとげでその心臓の所を刺した。するとあろうことかむすめはそのまま心臓が痛みだした。顧愷之はそこでまごころをもって言い寄ったところ、むすめがうけいれたので、そのままひそかに（とげを抜いた）。顧愷之は常に嵇康の四言詩を重んじており、そこでこれを絵に描いたのだが、いつも、「手に五弦を揮ふ」は易しいが、「目に帰雁を送る」は難しいと言っていた。人の姿を描くと、いつも世間一の出来映えだった。裴楷の肖像を描いたとき、頬の上に三本の毛を描き添えたところ、その絵を見る人には、裴楷の精神がより輝いていると感じられた。また謝鯤の肖像を作ったとき、岩山の中にある姿を描いてこう言った。「この方は丘壑のなかにいらっしゃるのがふさわしい」。殷仲堪を描こうとしたとき、殷仲堪は目の病があるからと固く断った。顧愷之が言うには「明府さまは目の故にそうおっしゃるだけでしょう。瞳をはっきり描いても、その上を飛白でひとはらいし、薄い雲が月をおおったようにすれば、なんと美しいことでありましょうか」。顧愷之は一箱分の絵を、箱の表を封印して、桓玄の所にあずけておいたことがあった。中身はみなたいそう大事にしていた絵ばかりであった。ところが桓玄はあろうことかその箱の後ろをあけて、ひそかに絵をとりだし、またもとの如く封をして顧愷之に返し、「あけてない」と偽った。顧愷之は封印の文字がもとのままであるのに、絵だけが失われているのを見て、ただ「すばらしい絵というものは神妙な存在と通じるものであり、姿を変えてどこかへいってしまったのであろう。それは人間が登仙するのとおなじこと」というばかりで、怪しむそぶりもなかった。

『晋書』顧愷之伝（2405）。四礼他本作四体、今訳文從晋書改、活字本於時作於詩、美乎下無顧字。張本鮑本為有作謂有、廼図作乃図、遂密下有去針而愈四字、五弦作五絃、拂上作拂之。張本仲堪下有仲字、美乎下無顧愷之三字、取画作取尽。鮑本已来作以来、嘗以作常以、自皆其至以還一行欠、紿上之作元。晋書善丹青下有図写特妙四字、重之下有以字、数年上有或字、目睛作目精、四礼作四体、無関作無闕少、阿堵物中無物字、遂密下有去針而愈愷之六字、每写下有起字、宜著作宜置、堪有目疾作仲堪有目病、不美乎下有仲堪乃從之五字、顧愷之嘗無顧字、桓玄所無所字、所珎下有惜字。『太平御覧』卷七百四十一心痛には「幽明録曰、顧長康在広陵、愛一女子、還家、長康思之不已、乃画作女形、簪着壁上、簪处正刺心、女行十里、忽心痛如刺、不能進」とあり、「かんざしでさしたところがちょうど心臓の所だった」と、心臓を刺したのは、顧愷之の意図的なものではなかったかのように書かれている。なおこの逸話は、梁の庾元威「論書」に「其後絵事逾精、丹青転妙、乃有釘女心痛、図魚癩集、敬君以之亡婦、王嬙由此失身」（『法書要録』卷二所引）とあるように、御覧が後に引く徐逸、敬君、王昭君の話とともに絵画の代表的逸話とされていたようである。「瞳を点じない」のは、既に衛協に同じ逸話が残っている（『歴代名画記』衛協条）。なお『歴代名画記』顧愷之伝も、この『晋書』の中の逸話をすべて引いている。『藝文類聚』画所引。ただし謝安、隣女、桓玄の三つの話は欠いている。また『太平広記』卷二百十も載せているが、これらの話の他にいくつかの逸話を合わせ載せており、かつ「出名画記」と注している。『册府元龜』図画部はこの『太平御覧』の引用にはほぼ同じ（ただし「去其針而愈」を備える）。

又曰、王献之、桓温常使画扇、筆悟落、因画作為鳥駁特牛甚妙

また言う、王献之は、桓温がかつて扇に絵を描かせたことがあったが、筆を誤って落とし、そこについた墨の跡をもとに黒いまだらの雄牛を描いて、非常にすばらしかった。

『晋書』王献之伝（2105）。他本悟落作誤落、今訳文従晋書改。鮑本曰作云、鳥駁誤作鳥駁。晋書常作嘗、画扇作書扇、悟作誤、作為無為字、特作犝。「特牛」は「犝牛」なら雌牛。『歴代名画記』王献之の伝にもこの部分を引用し、孫暢之「述画記」によるものとする。なお『事類賦』卷十五墨「汚扇上而因成駁牛」の注に「晋書曰、王献之与桓温書扇、誤為墨汚、因就成一駁犝、甚工」とあり、『太平御覧』の引用並びに現行『晋書』といささか字句を異にしている。（湯球の輯本は「臧栄緒晋書」として引用している）話の発想は曹不興の逸話と同じ。『歴代名画記』曹不興「孫権使画屏風、誤落筆点素、因就成蠅状、権疑其真、以手彈之。時称呉有八絶」。ただし、張彦遠は続けて「彦遠按、楊修与魏太祖画扇、悞点成蠅、遂有二事。孫暢之述画記亦云」としており、「述画記」はこの画牛の話をも楊修の逸話と考えていたらしい。なお『太平広記』卷二百十、『冊府元龜』図画部所引。

劉毅伝曰、毅平桓玄入建康、初桓玄於南州起齋、悉画盤龍於其上、号為盤龍齋、毅小字盤龍、至是遂居之

劉毅伝に言う、毅は桓玄を平定して建康に入った。話は戻るが、桓玄は南方に部屋を建てた際、天井をうごめく龍の絵でうめつくし、「盤龍齋」と呼んだ。劉毅は幼い頃のあざなが盤龍であり、こういういきさつで、そのままここにいることになった。

『晋書』劉毅伝（2207）。「毅平桓玄入建康」は、現行『晋書』には見えない。また『事類賦注』龍賦は「晋書曰、初、桓温南州起齋、悉画龍於其上、号曰盤龍齋、及玄篡、劉毅討玄、玄死於齋、而毅居之、毅小字盤龍」として記事が詳しくなっている。『太平御覧』卷百八十五齋では『晋徴祥説』として引用されている。

晋書曰、韓支字景先、鄧林婦病積年垂死、医巫皆息意、支為筮之、使画作野猪着臥处屏風上、一宿覺佳、於是遂差

晋書に言う、韓友、字は景先。鄧林の妻が病に伏せること数年、今にも死なんとする状況で、医者たちはみなさじを投げた。韓友が占いをたてて、いのししの絵を描いて、臥せている場所の屏風の上にはりつけたところ、一晩で気分が良くなり、そしてそのまま治ってしまった。

『晋書』韓友伝（2476）。張本鮑本景先下有龍舒長三字、着作著、差作瘥。活字本支為作支為。晋書支皆作友。他書皆引作韓友、今訳文改友。晋書又着作著。『太平御覧』卷九百三豕所引。「差」は「なおる」。『方言』に「差問知、愈也。南楚病愈者謂之差」。「息意」は積極的な意欲をなくすこと。袁宏『後漢紀』明帝永平十二年の条に「沙門者、漢言息心、蓋息意

去欲而帰於無為也」。なお韓友伝は、この後にもう一つ絵にまつわる逸話を載せている。「舒景廷掾王睦病死、已復魄、友為筮之、令丹画版作日月置牀頭、又以豹皮馬障泥臥上、立愈」。

齊書曰、滎陽毛惠遠善画馬、彭城劉瑱善画婦人、当世並為第一

齊書に言う、滎陽の毛惠遠は馬を描くのに優れ、彭城の劉瑱は女性を描くのにたけており、当世ではともに第一人者とされていた。

『南齊書』劉瑱伝（843）。南齊書無彭城二字、又無当字。なお『南史』劉瑱伝（1014）ではこの記事に続いて、劉瑱が王蒨に絵を描かせた記事が続く。『歷代名画記』毛惠遠の条には「毛惠遠中品上、滎陽陽武人。善画馬、時劉瑱善画婦人、並当代第一」とする。

又曰、齊王秀之字伯奮、仕至侍中、時宗測優遊、秀之弥所欽慕、乃令陸探微画其形与己相對

また言う、齊の王秀之、字は伯奮は、官仕して侍中になった人である。当時宗測という自由気ままな名士がいて、王秀之はこの人物をたいそう慕っており、陸探微にその宗測の姿を描かせて、その絵とさしむかうほどであった。

『南史』宗測伝（1862）。鮑本仕至無至字。現在の『南齊書』宗測伝にはこの記事は見えない。『南史』は「侍中王秀之、弥所欽慕、乃令陸探微画其形与己相對。又貽書曰、昔人有図画僑札、輕以自方耳」に作る。『南史』が現行の『南齊書』に見えぬ記事を多く増補しているのは既に趙翼が指摘するところ（『二十二史劄記』『南史增齊書処』）。なお、宗測も画家で、『南齊書』（941）『南史』（1861）ともに「欲遊名山、乃写祖炳所画尚子平図於壁上…中略…測善画、自図阮籍遇蘇門於行障上、坐臥對之、又画永業佛影臺、皆為妙作」と記す。（「炳」は宗炳。『南史』炳作少文。）『歷代名画記』は、「阮籍遇孫登」「永業寺佛影臺」「尚子平図」のこののみを「見南齊記」として記録し（『太平広記』卷二百十一も南齊記によるとして引いている）、『太平御覧』は画部下に、この『歷代名画記』の記述をそのまま載せている。『冊府元龜』図画部は、この王秀之の話を、以下の伏曼容の話とひとまとめにして、陸探微の逸話という形にして引用している。

又曰、王亮字叔奉、臨沂人也、齊竟陵王良開西邸、延賢俊、使工画其像、亮亦豫焉

また言う、王亮、字は叔奉、臨沂の人である。齊の竟陵王蕭子良が西邸を作った際、賢俊を招き、画工にその肖像を描かせたが、亮もまたこれにあずかった。

『南齊書』には見えない。『梁書』王亮伝（267）『南史』王亮伝（623）。他本良作子良、今誤文從改。又豫作預。兩史叔奉作奉叔、良作子良、賢俊作才俊、才俊下有以為士林館五字（南史闕館字）、豫作預。梁書画作図画。

梁書曰、伏曼容素美風彩、帝常以方嵇叔夜、使吳人陸探微画叔夜像以賜之

梁書に言う、伏曼容は美しい容貌を生まれながらに持っており、帝は嵇康に匹敵するものとし、吳の人陸探微に嵇康の絵を描かせて伏曼容に与えた。

『梁書』伏曼容伝(663)『南史』伏曼容伝(1731)。両史常作恒。『冊府元龜』図画部は、上記王秀之の逸話とひとまとめにして引用している。

又曰、昭明太子好士愛文、劉孝綽与陳郡殷芸、吳郡陸倕、瑯琊王筠、彭城劉洽等、同見賓礼、太子起堂、乃使画工先図孝綽

また言う、昭明太子は名士を好み文学を愛した人で、劉孝綽、陳郡の殷芸、吳郡の陸倕、瑯琊の王筠、彭城の劉洽らとは、皆会うときには賓礼を以て遇したのだが、太子が樂賢堂を立てた際には、画工に命じて最初に劉孝綽の肖像を描かせた。

『梁書』劉孝綽伝(480)『南史』劉孝綽伝(1011)。鮑本劉洽作到洽、堂作樂賢堂。両史劉洽作到洽、作到是。今訳文改到洽。活字本瑯作琅。南史賓礼無賓字、無画工二字。梁書図孝綽下有焉字。

後魏書曰、劉子業廟中皆画祖父形、入曾祖廟指像曰、此渠大英雄、生禽数天子、次入祖義隆廟指像曰、此渠不惡、次入駿廟曰、此渠大好色、顧謂左右曰、此渠大臙鼻、即令画工臙駿象鼻也

後魏書に言う、劉子業は廟中にそれぞれ父祖の形像を描かせた。曾祖劉裕の廟に入って、その像を指して言った。「彼は大英雄であり、天子数人を生け捕りにしたのだ」。ついで祖の劉義隆の廟に入り、その像を指して言った。「彼は悪い人ではなかった」。ついで父の劉駿の廟に入って言った。「彼は非常に好色な人間であった」。そして左右のお供の者に振り返って言った。「彼はすごい赤鼻だったぞ」。すぐに画工に命じて、駿の画像の鼻を赤鼻に描き変えた。

『魏書』劉子業伝(2146)。『北史』には見えない。他本臙作臙。今訳文従改臙。駿廟上活字本有父字張本鮑本有其父二字。活字本曾祖下有裕字。『魏書』の記述は「子業皆令廟別画其祖父形像、曾入裕廟、指裕像曰、此渠大英雄、生擒数天子、次入義隆廟、指義隆像曰、此渠亦不惡、但暮年中不免兇所去頭、次入其父駿廟、指駿像曰、此渠大好色、不忤尊卑、顧謂左右曰、渠大臙鼻、如何不臙之、即令画工臙駿象鼻」と詳しく、さらに続けて「其父子淫悖、書契所無也」としている。また『南史』前廢帝紀(69)には「帝自以為昔在東宮、不為孝武所愛、及即位、將掘景寧陵、太史言於帝不利而止、乃縱糞於陵、肆罵孝武帝為鬻奴」と記されている(『宋書』本紀には載せない)。『太平御覧』は、また卷三百六十七鼻に『談叢曰』として引いており、『魏書』の「指駿像曰」以下にはほぼ等しい。

北齊書曰、広陵王孝珩於廳上画蒼鷹、見者以為真焉

北齊書に言う、広寧王高孝珩は役所に鷹を描いたところ、その絵を見た者は本物だと思った。

『北齊書』高孝珩伝（144）『北史』高孝珩伝（1876）。張本鮑本鷹作鷹、晋書亦作鷹、兩史広陵作広寧、今訳文皆從改。兩史作嘗於廳事壁自画一蒼鷹見者皆以為真。『歷代名画記』は「高孝珩、世宗第二子、封広寧郡王尚書令大司徒、司州牧。博涉多才藝、嘗於廳事壁上画蒼鷹、觀者疑其真、鳩雀不敢近。又画朝士図、当時絶妙。為周師所虜、授開封縣侯。孝珩亦善音律、周武宴齊君臣、自彈琵琶、命孝珩吹笛。見北齊書」。また『太平広記』卷二百十一、『冊府元龜』図画部所引。なお『太平御覽』画下にも重複して収録されている。

又曰、魏収字伯起、鉅鹿曲陽人也、兼尚書僕射、帝於華林園別起玄洲苑、備極山林樓觀之麗、詔於閣上画収容像、其見重如此

また言う、魏収字は伯起、鉅鹿曲陽の人。官は兼尚書僕射となった。帝は華林園において別に玄洲苑を作り、それは山林楼観の華麗な姿を窮め尽くしたものであった。そして帝は詔して閣上に魏収の肖像を描かせた。魏収が帝に重んぜられたのはこれほどであったのである。

『北齊書』魏収伝（491）『北史』魏収伝（2034）。兩史備極無極字、樓觀作臺觀、無容像二字。兩史共に「河清二年、兼右僕射」のあとにこの文を載せている。

陳書曰、顧野王伝曰、宣城王為楊州刺史、野王及瑯琊王褒並為賓客、王甚愛其才、野王又好丹青、善図写、王於東府起齋、乃令野王画古賢、命王褒贊之、時人稱為二絶

陳書に言う、顧野王伝に言うには、宣城王が楊州刺史であったとき、顧野王と瑯琊の王褒が共に客として遇され、宣城王はその才能をはなはだ愛した。また顧野王は絵画を好み、絵が上手であったので、王が東府に部屋を建てた際、顧野王に命じて古の賢人を描かせ、王褒に命じて贊を作らせた。時の人々は「二絶」とほめたたえた。

『陳書』顧野王伝（399）『南史』顧野王伝（1688）。張本鮑本贊作讚。兩史贊之作書贊。南史好丹青作善丹青、無善図写三字、乃令野王無乃字。『歷代名画記』の顧野王伝は「顧野王、字希馮、吳郡人。七歲通五經、善属詞、能書画、長為鴻儒。天象地理、無不畢習、在梁為中領軍、時宣城王為楊州。野王善画、王褒善書、俱為賓友、時号二絶。入陳、官至黃門侍郎、年六十三、贈右衛將軍。見陳書」。『冊府元龜』図画部所引。

唐書曰、張昌宗嘗命画工図写武三思及納言李嶠、鳳閣侍郎蘇味道、夏官侍郎李迥秀、麟臺少監王紹宗等十八人形像、号为高士図

唐書に言う、張昌宗は嘗て画工に命じて武三思や納言李嶠、鳳閣侍郎蘇味道、夏官侍郎李迥

秀、麟臺少監王紹宗らの十八人の肖像を描かせ、これを高士図と呼んだ。

『旧唐書』朱敬則伝（2915）。朱敬則伝がこの話を引く意味は、この引用に続く「毎引敬則預其事、固辞不就、其高潔守正如此」にある。

又曰、薛稷善画、博採古跡、睿宗在藩、留意於小学、稷於是特見招引

また言う、薛稷は絵がうまく、古の名品を博く集めていた。睿宗がまだ藩にあったとき、この雑技の学（絵画）に興味を寄せ、薛稷はそれで特に彼のもとに招かれた。

『旧唐書』薛稷伝（2591）。活字本博作傳。旧唐書博採作博探。『歴代名画記』には「多才藻、工書画。薛稷外祖魏文貞公、富有書画、多虞褚手寫表疏。稷銳意模学、窮年忘倦、睿宗在藩、特見引遇、拜黃門中書侍郎礼工二尚書」。『冊府元龜』図画部所引。

又曰、韓滉尤工書、兼善丹青、以絵事非急務、自晦其能、未嘗伝之

また言う、韓滉は書に巧みで、兼ねて絵画も得意とした。が、絵画の事は急務でないという理由で、その能力を人に見せることなく、これを誰かに伝えることはなかった。

『旧唐書』韓滉伝（3603）。『歴代名画記』は韓滉の伝を立てているが、この話は掲載していない。『冊府元龜』図画部所引。

又曰、王維書画、特臻其妙、筆蹤措思、參於造化、而創意経図、即有所缺、如山水平遠、雲峰石色、絶跡天機、非絵者之所及也、人有得奏楽図者、不知其名、維視之曰、霓裳第三疊第一拍也、好事者進楽工、按之一無差誤、咸服其精思也

また言う、王維の書画は神妙の限りを尽くし、その技術と精神は造化の働きに並ぶものであった。構図の創意には、欠点もあったが、山水の平遠、雲に隠された峰や岩の描き方は、天賦の才の見せる絶品というべく、世の絵描きの及ぶところではなかった。ある人が奏楽が描かれた絵を手に入れたが、画題がわからなかった。王維はこれを見て、「霓裳の第三疊第一拍だ」と言った。好事者が楽工に示すと、これを調べてみるにひとつとしてまちがってはいなかった。みな王維の精思に感服した。

『旧唐書』王維伝（5052）。活字本缺作缺、拍作柏、張本鮑本進楽工作集楽工、鮑本蹤作跡、跡作迹。旧唐書奏楽図者無者字、進楽工作集楽工、一無差誤無誤字。「創意」は『歴代名画記』論画体工用撮写「顧生首創維摩詰像見第四卷、有清羸示病之容、隠几忘言之状、陸与張皆効之、終不及矣。張墨陸探微張僧繇、並画維摩詰居士、終不及顧之所創者也」の「創」が示すように「特定のモチーフの描き方の典型を作り出す」ことを指す。なお『歴代名画記』卷五「其後北齊曹仲達、梁朝張僧繇、唐朝吳道玄周昉、各有損益、聖賢盼蛩、有足動人、璽

珞天衣、創意各異。至今刻画之家、列其模範、曰曹曰張曰吳曰周、斯万古不易矣」参照。「経図」の「経」は謝赫の六法の「経営位置」。なお『歴代名画記』は王維の伝を立てるが、この話は載せない。『太平広記』巻二百十一は「出国史補」として引用する。『册府元龜』図画部所引。また『図画見聞誌』巻五「故事拾遺」の「王維」の条にも載っている。なお、銭鍾書『管錐編』第二冊（1979・北京）七百十八頁以下の考証を参照。

又曰、閻立本雖有応務之才、而尤善図画於写真、秦府十八学士図及貞観中凌煙閣功臣図並立本之跡也、時人咸称其妙、太宗嘗与侍臣学士、泛舟於春苑、池中有異鳥、随波容与、太宗擊賞、数賜詔座者為詠、召立本令写之、時閻外伝呼云、画師閻立本、時已為主爵郎中、奔走流汗、俛伏池側、手揮丹粉、瞻望座賓、不勝愧赧、退誠其子曰、吾少好讀書、幸免墻面、縁情染翰、頗及儕流、唯以丹青見知、躬厮役之務、辱莫大焉、汝其深戒、勿習此末伎

また言う、閻立本は、政務の才能があったのではあるが、最も得意な分野は肖像を描くことであった。秦府十八学士図や貞観年間に作られた凌煙閣の功臣図は、みな閻立本の作品であり、時の人達はみな彼の妙技をほめたたえた。太宗がかつて侍臣学士とともに舟を春苑に浮かべて遊んでいたところ、池の中に珍しい鳥がいて、波につれてゆらゆらとただよっていた。太宗はこの様子を非常に気に入り、しばしば命令を出して座にいる人々に詩を詠ませ、閻立本を召して絵に描かせようとした。そこで、室内から（外へ）人伝えに「えかきの閻立本」と呼ばせた。その時閻立本はすでに主爵郎中となっていたのだが、汗を流して走ってかけつけ、池の傍らにひれ伏し、絵の具をのせながら、座にいる賓客達を仰ぎ見、恥ずかしさに顔を赤らめるのをとどめられなかった。退席して息子に戒めて言うには、「わたしは幼い頃から書物を読んで学問を修め、幸いに無能であるは免れ、こころのおもむくまま筆を執り、いささか末席に連なることができた。しかしながらただ絵画という技術のみで名を知られ、下僕のつとめに従事するのは、これより恥ずべきことはない。おまえはこのことを深く戒めとし、この絵画という末技を習ってはならぬ」。

『旧唐書』閻立本伝（2680）。他本尤善図画於写真作尤善於図画写真、張本鮑本数字下有次字、退誠上有及字、汝其作汝宜。墻面張本作牆面鮑本作面牆。鮑本召立本作召令立本、大焉誤作大馬。旧唐書図画下有工字、数賜作数四、写之作写焉、愧赧作愧赧、墻面作牆面、深戒作深誠。「墻面」は『尚書』周官。無能であることを指す。『歴代名画記』は「国史云、太宗与侍臣泛遊春苑、池中有奇鳥、随波容与、上愛玩不已。召侍從之臣歌詠之、急召立本写貌。閻内伝呼画師閻立本、立本時已爲主爵郎中、奔走流汗、俯伏池側、手揮丹素、目瞻坐賓、不勝愧赧。退戒其子曰、吾少好讀書属詞、今独以丹青見知、躬厮役之務、辱莫大焉、爾宜深戒、勿習此藝。然性之所好、終不能舍」に作る。『太平広記』巻二百十一は「出大唐新語」として引用している。また『太平御覧』巻四百五十九鑑戒、『册府元龜』図画部所引。

又曰、裴延齡恃恩、惟顧少連不避延齡、及画一鵬、令群鳥噪之、遂献焉

また言う、裴延齡は帝に重用せられたのを頼みとして専横を極めたが、ただ顧少連のみは延

齡にはばかりとなく、一羽の鷺を描いて鳥たちを集めてさわがせ、そのままその絵を延齡に献上した。

『旧唐書』には見えない。張本避作遊。鮑本この条を欠く。『唐国史補』卷上に「裴延齡恃恩輕躁、班列懼之、惟顧少連不避延齡、嘗画一鵬、群鳥噪之、以献上、上知衆怒如是、故益信之、而竟不大用」と見える。『太平広記』卷二百三十九は「譚賓録」としてこの話を引く（末句而竟以下を欠く）。鵬は佞臣に喩える。『後漢書』張衡伝（1918）「鵬鶚競於貪婪兮」の李賢注に「以喩讒佞也」。

唐李宝臣為成徳軍節度使、宝臣為朱滔使曰、吾聞朱公貌如神、得而識之、願因絵事而覩、可乎、滔乃図其形以示之、宝臣懸於射堂、命諸將熟視之、曰、朱公信神人也

唐の李宝臣は成徳軍節度使となった。李宝臣は朱滔に使いを送って言うには「わたくしは朱公の容貌が神のようだと言っている。それがどんなものか知りたいと思い、願わくば絵に描いていただいて、それを拝見したいと思うのですが」。朱滔はそこでその肖像を描いて渡したところ、李宝臣はこの絵を射堂に懸け、配下の諸將にこれをじっくり見させて、言った。「朱公は本当に神人である」。

『旧唐書』李宝臣伝（3867）。他本為朱滔使作謂朱滔使、張本鮑本文初有又曰二字、鮑本吾聞無吾字。旧唐書亦為朱作謂朱、如神下有安字。

鍾岍良吏伝曰、鄭純字長伯、広漢人也、為永昌太守、清廉独絶、及卒、列画東観

鍾岍の良吏伝に言う、鄭純字は長伯、広漢の人である。永昌の太守となり、非常に清廉であった。亡くなると、その肖像を東観に掲げられた。

『後漢書』哀牢夷伝（2851）に「西部都尉広漢鄭純為政清絜、化行夷貊、君長感慕、皆献土珍、頌徳美、天子嘉之、即以為永昌大守」。鄭純のことは『華陽国志』卷四永昌郡にも見えるが、東観云々はこの良吏伝のみに記される。

三齊記略曰、秦始皇求与海神相見、神云我形醜、約莫図我形、当与帝会、始皇入海三十里、与神相見、左右有巧者、潜以脚画神形、神怒帝負約、乃令帝速去、始皇即馬、前脚猶立、後脚随陷、歩僅得登岸、画者溺死

三齊記略に言う、秦の始皇帝は海神との会見を求めたところ、海神は「わたしは姿が醜いので、私の姿を絵にしないということを約束するならば、帝と会いましょう」と言った。始皇帝は海（上に作られた橋）を進むこと三十里、海神と会見したが、家臣に器用な者があり、ひそかに足でもって海神の姿を描いた。（それが発覚し）海神は始皇帝が約束に背いたことを怒った。そこで始皇帝に速やかに退去を命じた。始皇帝はすぐさま馬を引き返したが、馬

の前足はなお立っていたが、後足はおちてしまい、始皇は歩いて岸にたどり着いたが、絵を描いた家臣は溺れ死んだ。

他本即馬作即駟馬、今訳文従改。張本鮑本無歩字。『歴代名画記』張衡の条には「彦遠按、三齊記云、昔秦始皇見海神、使左右巧者以足画之」と見える。『藝文類聚』卷七十九「神」では「(三齊略記)又曰、始皇於海中作石橋、非人功所建、海神為之豎柱、始皇感其惠通、敬其神、求与相見、海神答曰、我形醜、莫図我形、当与帝会。乃從石塘上入海、三十里相見、莫左右動手、巧者潜以脚画其状、神怒曰、帝負我約、速去、始皇駟馬還、前脚猶立、後脚隨崩、僅得登岸、画者溺於海、衆山之石皆住、今猶岌岌、無不東趣」に作る。また『太平御覽』卷八百八十二神、『水經注』濡水注所引。なお前掲『管錐編』第二冊七百十一頁以下を参照。

続齊諧記曰、魏明帝遊洛水、水中有白獺、靡淨可憐、見之輒去、帝顧玩之、終不可得、侍中徐景山曰、臣聞、獺嗜鯢魚、乃不避死、可以此候之、乃自画板作兩生鯢音溜魚懸岸、於是群獺競赴、遂一時執得、帝嘉之謂曰、不聞卿知画、何其妙也、答曰、臣亦未嘗執筆、人之所作者、自可庶幾耳、帝曰、是善用所長者也

続齊諧記に言う、魏の明帝が洛水に遊んだ際、水中に白獺がいた。美しく愛らしく、見ようとするとすぐに逃げていってしまう。帝はこれを手に入れようとしたが、結局だめであった。そこで侍中の徐邈が言うには、「わたくしが聞いておりますところでは、獺はボラが大好きで、なんと死をも恐れぬほどであります。このボラを用いて獺をまちましよう」。そこで徐邈は自ら板に二つのボラ（鯢の音は溜）を描いて岸に懸けておいた。すると獺たちが競ってやってきたため、そのまま一度に執えることができた。帝はこれをほめてこういった。「おぬしが絵の事に通じていたとは知らなかった。なんと妙技ではないか」。徐邈が答えて言う、「わたくしおっしゃるように筆をとって描いたことなどございませんでした。誰が描きましても、このようになるものでございます」。帝が言う、「これはその得意とするものをうまく使ったということだ」。

張本鮑本見之作見人、玩之無之字、侍中作侍臣。鮑本欠音注。『古今逸史』本『続齊諧記』は以下の如し。「魏明帝遊洛水、水中有白獺数頭、美静可憐、見人輒去、帝欲見之、終莫能遂、侍中徐景山曰、獺嗜鯢魚、乃不避死、画板作兩生鯢魚懸置岸上、於是群獺競逐、一時執得、帝甚佳之曰、聞卿知画、何其妙也、答曰、臣亦未嘗執筆、然人之所目可庶幾耳、帝曰、是善用所長者」。『太平広記』卷二百十には『齊諧記』として引用する。『太平御覽』本巻には『魏氏春秋』としての引用もある（既見）。『歴代名画記』徐邈の条には「魏明帝遊洛水、見白獺愛之、不可得。邈曰、獺嗜鯢魚、乃不避死。遂画板作鯢魚懸岸、群獺競来、一時執得。帝嘉歎曰、卿画何其神也。答曰、臣未嘗執筆、人所作者、自可庶幾。見続齊諧記」とある。なお前掲『管錐編』第二冊七百十一頁以下参照。

西京雜記曰、元帝後宮既多、不得常見、乃使画工図其形、按状幸之、諸宮人皆賂画工、多者

十萬、王嬙不肯、遂不得見、後匈奴求美女、帝按図、以昭君行、及召見、貌為第一、帝悔之、而名籍已去、乃按其事、画工弃市、籍貨、画工有杜陵毛延寿、写人好醜老少、必得其真、安陵陳敞、新豐劉白龔寬、並工牛馬人形、杜楊望亦善画、尤善布色、樊育亦善布色、同日弃市、京師画工、於是差稀

西京雜記に言う、元帝の後宮の宮女達は非常に数が多かったので、誰もがいつもお目通りがかなうというわけにもいかなかった。そこで画工に姿を描かせて、その容貌を見て、誰の所に御幸するかを決めることにした。すると宮女達は皆画工に賄賂を送って、多いものは十萬金にも及んだ。ところが王昭君のみは賄賂を送ろうとはせず、そのまま元帝とのお目見えはなくなった。その後、匈奴が美女を要求してきたので、元帝は、肖像画を見て選定し、王昭君を行かせることにした。王昭君を召しだして謁見する段になり、その容貌が宮女一であったことを知り、元帝はこれを悔やんだが、しかしながら名簿は既に先方に届けられていた（のであきらめるより仕方がなかった）。そこでこの賄賂事件を究明し、画工達は市中で首をはねられ、ためこんだ財貨を調べ上げたうえで没収された。その画工の中には、以下の者達があった。杜陵の毛延寿は人物を描いて、その好醜老少、必ずその真の姿をとらえた。安陵の陳敞、新豐の劉白と龔寬は並びに牛馬や人の姿形にすぐれた。杜楊望もまた絵がうまく、特に彩色にすぐれた。樊育もまた彩色を得意とした。彼らは同じ日に処刑され、都の画工はこれではほとんど誰もいない状態となった。

『西京雜記』卷二「画工棄市」。他本陳敞作陳敞。張本鮑本按図作案図、同日弃市之弃作棄。活字本杜陵作桂陵。張本十萬作一万、杜楊望上有下字。鮑本王嬙作王昭君。今本『西京雜記』は「元帝後宮既多、不得常見、乃使画工図其形、案図召幸之、諸宮人皆賂画工、多者十萬、少者亦不減五萬、独王嬙不肯、遂不得見、後匈奴入朝、求美人為關氏、於是上案図、以昭君行、及去召見、貌為後宮第一、善應對、举止閑雅、帝悔之、而名籍已定、帝重信於外国、故不復更人、乃窮按其事、画工皆棄市、籍其家、資皆巨萬、画工有杜陵毛延寿、為人形醜好老少、必得其真、安陵陳敞、新豐劉白龔寬、並工為牛馬飛鳥、亦肖人形、好醜不逮延寿、下社杜陽望亦善画、尤善布色、樊育亦善布色、同日棄市、京師画工、於是差稀」。籍は帳面に記帳して没収すること。王昭君の話は『漢書』元帝紀、匈奴伝、『後漢書』匈奴伝にも見える。『歷代名画記』毛延寿の段にも『西京雜記』からの引用として引かれている。王楙『野客叢書』卷八「明妃事」には、『後漢書』匈奴伝の記述との違いについて触れている。『藝文類聚』画、『太平広記』卷二百十所引。『太平御覧』卷三百八十一美婦人下は『世説』として引く。

拾遺記曰、周靈王時、有韓房者、自渠胥国来、献王駝、房長一文、垂髮至膝、周人見之如神明矣、以丹砂画左右手為日月盈缺之勢、不異真焉、可照百餘步、又噴水為雲、蔽虧其側、靈王視之、忽不知所在、或云昇天

拾遺記に言う、周の靈王の時、韓房という者が渠胥国からやってきて、王にラクダを献じたことがあった。韓房の身の丈は一丈、髪の毛が膝まで垂れていて、周の人はこれを見て神明

ある人のようだと思った。彼は丹砂を用いて、左右の手で日月が満ち欠けする様子を描き、現実と全く違わぬものであり、その光は百歩離れたところを照らすほどだった。また水を噴くとそれが雲となり、そのあたりを覆ってしまった。霊王が韓房を見ると、気がつかぬ間にどこへ行ったかわからなくなってしまった。ある人は「天に登ったのだ」と言った。

『拾遺記』卷三周霊王。一文活字本張本作一丈鮑本作二丈、今訳文改丈。張本王作玉。今本『拾遺記』は「有韓房者、自渠胥国来、献王駱駝高五尺、虎魄鳳凰高六尺、火齊鏡広三尺、閤中視物如昼、向鏡語、則鏡中影応声而答、韓房身長一丈、垂髪至膝、以丹砂画左右手如日月盈缺之勢、可照百餘歩、周人見之、如神明矣、霊王末年、亦不知所在」と作る。底本に従えば、献上されたのは本物の駱駝だが、今本の「高五尺」と次の「琥珀の鳳凰」に従えば、「玉製の駱駝」ということになり、張本が「王」を「玉」に作るのに従うべきかもしれない。『太平広記』卷二百二十九所引。

又曰、秦始皇二年、罽賓国献善画之者、名烈裔、口含丹黒噴壁、即成龍雲之像、以指歴地、若繩分矣、転手若規、方寸之内、四瀆五岳列国、莫不悉備、画為鳳鸞、皆軒軒若行也

また言う、秦の始皇二年、罽賓国が絵のうまい人間を献じてきた。名を烈裔という。口に赤と黒の絵の具を含んで壁に吹きつけるやたちまち龍雲の形象となった。指で地面を分けようと線を引くと、縄を使ったかのごとくまっすぐで、手をまわして円を描くとコンパスを使ったようだった。一寸四方の小さな画面に四瀆や五岳、列国の様子を描き尽くし、鳳鸞を描けば、みな高く舞い上がって今にも飛んでいくようであった。

『拾遺記』卷四秦始皇。他本画之者無之字、張本鮑本丹黒作丹墨。烈裔活字本張本作烈裔鮑本作烈衷、今訳文従他書所引改裔。『拾遺記』は「始皇元年、罽賓国献刻玉善画工名裔、使含丹青以漱地、即成魍魎及詭怪群物之象、刻玉為百獸之形、毛髪宛若真矣、皆銘其臆前、記以日月、工人以指画地、長百丈、直如繩墨、方寸之内、画以四瀆五岳列国之図、又画為龍鳳、鸞翥若飛、皆不可点睛、或点之、必飛走也、始皇嗟曰、刻画之形、何得飛走、使以淳漆各点両玉虎一眼睛、旬日則失之、不知所在」。『歷代名画記』烈裔伝所引。『太平御覧』卷七百五十二巧、卷八百九十一虎上、『太平広記』卷二百十にも見える。

韓子曰、客有為齊王画者、王問曰、画孰最難、対曰狗馬最難、孰曰最易、対曰鬼魅最易、夫狗馬人之所知也、且暮覩於前、不可類之、故難也、鬼魅無形、無形者不可覩、故易也

韓非子に言う、食客の中に、齊王のために絵を描く人間がいた。王が質問して言った。「絵画は何が一番難しいか」。答えて言うには、「犬や馬が最も難しいです」。「何が最も易しいか」。答えて言うには、「お化けのたぐいが最も易しいです。犬や馬というものは、人々が皆見知っているものです。朝夕目の前で見ているものですから、これに似せるのは難しいので、それで難しいのです。お化けのたぐいは形が無く、形がないものは見ることはできませんので、それで易しいのです」

『韓非子』外儲説左上。他本孰曰作孰為。『韓非子』は「客有為齊王画者、齊王問曰、画孰最難者、曰犬馬最難、孰最易者、曰鬼魅最易、夫犬馬人之所知也、旦暮罄於前、不可類之、故難、鬼魅無形者、不罄於前、故易之也」。『藝文類聚』画所引。

淮南子曰、画西施之面者、美而可悦、規孟賁之目者、大而可畏

淮南子に言う、西施の顔を描いたところで、美しいとはいえ、人をよろこばせることができようか。孟賁の目を描いたところで、大きいとはいえ、人を恐れさせることができようか。

『淮南子』説山訓。張本鮑本規作覩。『淮南子』は「画西施之面、美而不可説、規孟賁之目、大而不可畏」に作る。しばらく『太平御覧』の引用は、反語として読む。さらに『淮南子』は「君形者亡焉」と続いており、「形に君たる」生気がかけているものは、悦ばすことも畏れさせることもできない、というのがこの文章の主題である。高誘は「生氣者、人形之君、規画人形、無有生氣、故曰君形亡」と注する。

又曰、宋画呉冶く宋人工画、呉人工冶、其為微妙、堯舜之聖、不能及也

また言う、宋の絵画と呉の冶金は、非常に精微神妙で、堯舜といった聖人でも、及ばないものである。

『淮南子』脩務訓。いま『淮南子』は「宋画呉冶、刻刑鏤法、乱脩曲出、其為微妙、堯舜之聖、不能及」に作る。『太平御覧』巻八百三十三冶所引。『歴代名画記』「論画体工用撮写」には「淮南子云、宋人善画、呉人善冶（原注治賦色也）」として引用されている。

抱朴子曰、衛協張黒有画聖之名

抱朴子に言う、衛協と張墨は画聖という名声がある。

『抱朴子』内篇辨問。御覧各本皆作張黒誤、今訳文従他書改張墨。『抱朴子』は「善図画之過人者、則謂之画聖。故衛協張墨、於今有画聖之名焉」と作る。なおこの『抱朴子』の文は、『歴代名画記』には「叙師資伝授南北時代」と衛協の条の二カ所に引用され、衛協の条には「抱朴子云」として引かれている。

華陽国志曰、漢嘉郡以禦雒夷、宜炫曜之、廼雕飾城墻、華画府寺及諸門、作山神海靈、窮奇鑿齒、夷人初出入恐、騾馬或憚之趙赳

華陽国志に言う、漢嘉郡が、異民族たちを防ぐには、これを幻惑させようと、そこで城壁を飾り立てて、役所と諸門には山海の神霊、窮奇や鑿齒をきらびやかに描いた。すると異民族

は進入してくるや恐れおののき、馬たちはこれを忌避して躊躇したのであった。

『華陽国志』卷三の佚文。他本趙作趙。張本鮑本廼作乃、墻作牆。鮑本曜作耀、初出入無初字。「漢嘉郡」は卷三にあるべきものだが、今本には欠けている。窮奇を描く意味は、『春秋左氏伝』文公十八年「舜臣堯、賓于四門、流四凶族、渾敦、窮奇、檮杌、饕餮、投諸四裔、以禦魑魅」。

説苑曰、斉起九重之臺、国中有能画者則賜之錢、狂卒敬君居常飢寒、其妻端正、敬君工画、貪賜画臺、去家日久、思念其婦、遂画其像、向之喜笑、旁人見以白王、王以錢百万請妻、敬君惶怖、許聽

説苑に言う、斉の国は九重の台閣を作ろうとして、国内の絵に巧みなものがあればこれにお金を与え（て召しだし）た。放蕩輕率であった敬君は、家は常に飢えと寒さに苦しむ状態であったが、その夫人は端正な美人であった。敬君は絵に巧みであったので、その報酬を目当てに、台閣の絵画制作に参加した。家を離れて相当な日月が過ぎて、夫人のことを思うにつれ、そのまま夫人の絵を描いて、この絵と向かい合つてにこにこしていた。傍らで見ていた人がこのことを王に申し上げたところ、王は百万錢を以て夫人を譲り受けたいと持ちかけた。敬君はおそれおののき、その言葉に従った。

『説苑』の逸文。張本鮑本画臺作画錢。他に『藝文類聚』三十二、『太平御覧』三百八十一、『太平広記』卷二百十、『冊府元龜』図画部所引。『太平御覧』は、『藝文類聚』等の引文に比べると後半部に大きな省略がある。「傍人見以白王」のあとを『藝文類聚』は「王召問之、対曰、有妻如此、去家日久、心常念之、竊画其像、以慰離心、不悟上聞」と続けて終わっており、『太平御覧』三百八十一は「王即設酒、与敬君相楽、謂敬君曰、国中献女無好者、以錢百万謂（当作請）妻可乎、不者殺汝、敬君惶惶聽許」と続けている。『歴代名画記』では「敬君者、善画。斉王起九重臺、召敬君画之、敬君久不得帰、思其妻、乃画妻对之。斉王知其妻美、与錢百万、納其妻。劉向説苑具載」。

世説曰、戴安道為范宣画南都賦図、范宣看而咨嗟焉

世説に言う、戴安道は范宣のために南都賦図を描いた。范宣はこれを観て感嘆した。

『世説新語』巧藝篇。全文は「戴安道就范宣学、視范所為、范読書亦読書、范抄書亦抄書。唯独好画、范以為无用、不宜勞思于此。戴乃画南都賦図、范看畢咨嗟、甚以為有益、始重画」。『歴代名画記』は「達嘗就范宣学、范見達画、以為無用之事、不宜虚勞心思。達乃与宣画南都賦、范觀畢嗟歎、甚以為有益、乃亦学画」に作る。

俗説曰、顧虎頭為人画扇、作阮籍嵇康、都不点眼精、送還扇主曰、点眼精便欲能語

『俗説』に言う、顧愷之はある人のために扇に絵を描いて、それは阮籍嵇康の図だったのだが、兩人にまなこを入れなかった。そして扇の持ち主に帰すときに言った。「目を入れちゃったら、話し出してしまいますよ」。

張本眼精皆作眼睛。活字本惟上精作睛。『太平御覧』七百二「扇」では「俗説曰、顧虎頭為人画扇、作嵇阮、都不点眼精、主問之、顧答曰、那可点精、点精便語」。『北堂書鈔』百三十四「扇」は「俗説曰、顧虎頭為人画扇、作嵇阮、都不点眼睛、便送還扇主曰、点睛便能語也」。顧愷之が瞳を描き入れないのは、前出の『晋書』の顧愷之の記述にも見えるが、瞳を入れると生きたものようになってしまうという発想は、『歴代名画記』張僧繇の「又金陵安樂寺四白龍、不点眼睛、每云、点睛即飛去。人以為妄誕、固請点之、須臾雷電破壁、兩龍乘雲騰去上天、二龍未点眼者現在」にも見える。なお前掲『管錐編』第二冊七百十四頁以下参照。

論衡曰、人好觀図画上所画古之死人也、見死人之面、孰與視其言行、古賢之遺文、竹帛之所載粲然、豈徒墻壁之画哉

論衡に言う、人々は好んで絵に描かれた昔の死人を見るが、死人の顔を見るのと、その人の言行を見るのと、どちらが優れるであろう。古の賢人の残した文章は、竹簡や絹帛に書かれて燦然と輝いている。どうしてただ壁に描かれた絵だけを尊重しようか。

『論衡』別通篇。他本画上作画夫、張本鮑本所画下有者字、墻作牆。鮑本古賢作古昔。『論衡』は「人好觀図画者、図上所画、古之列人也。見列人之面、孰與觀其言行、置之空壁、形容具存、人不激勸者、不見言行也。古賢之遺文、竹帛之所載粲然、豈徒墻壁之画哉」と作る。『歴代名画記』は「余嘗恨王充之不知言、云人觀図画上所画古人也、視画古人如視死人、見其面而不若觀其言行。古賢之道、竹帛之所載燦然矣、豈徒牆壁之画哉。余以此等之論、与夫大笑其道、詬病其儒、以食与耳、对牛鼓簧、又何異哉」としてその発想を否定している。

世本曰、史皇作図<史皇、黄帝臣也、謂画物像也>

世本に言う、史皇は図を作った。(史皇は黄帝の臣下である。ものの像を描いたことを言うのである)

張本鮑本注謂字上有図字。また『文選』卷五十七「宋孝武宣貴妃誄」の李善注に引く。李善注によれば、「史皇黄帝臣也」以下は宋忠(衷)の注の部分。「史皇作図」は『呂氏春秋』勿躬にも見える。『歴代名画記』は「史皇、黄帝之臣也。始善図画、創制垂法、体象天地、功侔造化、首冠群工、不亦宜哉。見世本、与倉頡同時」として引用している。『册府元龜』図画部所引。

新序曰、葉公子高好龍、門亭軒牖、皆画龍形、一旦真龍垂頭於窓、掉尾於戸、葉公驚走失措

新序に言う、葉公子高は龍が好きで、門亭軒牖、何もかもに龍の姿が描いた。ある日のこと、本物の龍が頭を窓から垂らし、しっぽを戸から出して揺らしていた。葉公は驚いて逃げていき、あわてふためいた。

『新序』雑事五。張本窓作窻。活字本失作矢。「棹」は「掉」の意に解した。『新序』では、子張がたとえ話として引く形式になっている。全文は「子張見魯哀公、七日而哀公不礼、託僕夫而去曰、臣聞君好士、故不遠千里之外、犯霜露、冒塵垢、百舍重趼、不敢休息以見君、七日而君不礼、君之好士也、有似葉公子高之好龍也、葉公子高好龍、鉤以写龍、鑿以写龍、屋室雕文以写龍、於是夫龍聞而下之、窺頭於牖、拖尾於堂、葉公見之、棄而還走、失其魂魄、五色無主、是葉公非好龍也、好夫似龍而非龍者也、今臣聞君好士、故不遠千里之外以見君、七日不礼、君非好士也、好夫似士而非士者也、詩曰、中心藏之、何日忘之、敢託而去」。なお『太平御覽』卷三百八十九、卷四百七十五、卷九百二十九にも「莊子曰」として引用し、それぞれ皆『新序』にも見える旨の注がある。また『藝文類聚』卷九十六、『白氏六帖』卷二十九も『莊子』として引くが、現行『莊子』には見えない逸文。なお、『文選』卷三十六「天監三年策秀才文」の李善注が引くこの文章を、尤本ならびに胡克家本が『新序』とするのに対し、袁本茶陵本が『莊子』としていること、胡克家の『文選考異』卷六参照。

風俗通曰、按百家書云、公輸般之水上見蠡、謂蠡曰、開汝匣見汝形、蠡適出頭、般以足画図之、缺

風俗通に言う、しらべかんがえるに、百家書に次のようにある。公輸般が川のほとりにゆき、かわになに出会った。彼がかわになに、「おまえのはこをあけておまえの姿を見せよ」というと、かわになは頭を出したので、般は足でこれを描いた。欠けている。

『風俗通』の佚文。張本鮑本適作遂、文末無缺字。活字本缺作缺。「缺」は抄出者のメモが残ったものか。他に『太平御覽』卷百八十八鋪首、『藝文類聚』画所引。画像石等に見られる門戸の「鋪首」の由来が語られる話である。『太平御覽』卷百八十八鋪首は「風俗通曰、門戸鋪首、百家書云、輸般見水上蠡、謂之曰、開汝頭、見汝形、蠡適出頭、般以足画図之。蠡引閉其戸、終不可開、設之門戸、欲使閉藏、当如此固密也」と作る。『歴代名画記』の張衡の条には「又按、応劭風俗通云、公輸班見水上蠶形、以足画之。巧者非止於手運思、脚亦応乎心也」とされる。なお王利器氏は『風俗通義校注』において、「水經渭水注十九、「渭橋旧有村留神像、此神嘗与魯班語、班令其入出、村留曰、『我貌很醜、卿善物容、我不能出。』班於是拱手与言曰、『出頭見我。』村留乃出、班於是以脚画地、村留覺之、便没水、故置其像於水、惟背以上立。」蓋即此神話而異伝」と考証している。なお前掲『管錐編』第二冊七百一十一頁以下を参照。

古今名画録曰、晋有史道碩、画田家十月図、為世所珍

古今名画録に言う、晋に史道碩という人があり、田家十月図を描き、世の珍重するところとなった。

『歴代名画記』の史道碩の条には、「田家十月図」を著録する。

孫暢之述画曰、漢靈帝詔蔡邕、図赤泉侯楊喜五世将相形像於省中、又詔邕為讃、仍令自書之、邕文画書于時独擅、可謂備三美矣

孫暢之の述画に言う、漢の靈帝は蔡邕に詔して、赤泉侯の楊喜以下の五代の将相の形像を省中に描かせ、さらに蔡邕に詔して讃を作らせ、なおそのまま自らこれを書き付けさせた。蔡邕の文と画と書は当時彼の独壇場であり、三美を備えたものといえよう。

張本鮑本像於作像于。『歴代名画記』では「靈帝詔邕画赤泉侯五代将相於省、喜震叔節賜彪。兼命為讃及書。邕画与讃、皆擅名於代、時称三美。見東觀漢記、并孫暢之述画」。

又曰、劉裒、漢靈帝時作雲漢図、人見之、自然覺熱、更画北風図、熱者還覺涼

また言う、劉裒は、漢の靈帝の時に雲漢図を作り、これを見た人は自然に暑さを感じ、さらに北風図を描くと、暑かったのがかえて今度は涼しさを感じるようになった。

『歴代名画記』では「劉裒、漢桓帝時人、曾画雲漢図、人見之覺熱、又画北風図、人見之覺涼。官至蜀郡太守。見孫暢之述画記、及張華博物志云」。『太平広記』巻二百十所引。なお張彦遠の言う『博物志』だが、今本には見えず、逸文である。

魏陳思王画讃序曰、蓋画者鳥書之流也、昔明德馬后美於色、厚於德、帝用喜之、嘗從觀画、過虞舜之像、見俄皇女英、帝指之戲后曰、恨不得如此人為妃、又前見陶唐之像、后指堯曰、嗟乎、群臣百僚、恨不戴君如是、帝顧而咨嗟焉

魏の陳思王曹植の画賛序に言う、思うに絵画というものは、鳥書の流れのひとつである。昔、明德馬后は、容貌美しく、厚德を備えていたので、帝はこの后を重用した。あるとき馬后が帝につき従って絵画を見てまわったとき、舜の像のところにさしかかり、俄皇と女英を見て、帝はこの絵を指さして、馬后に戯れに言った。「このような人を妃にできなかったことは残念なことである」。さらに進んで堯の像を見たところ、馬后は堯を指さして言った。「ああ、帝の家来達よ、このような君主を君主と仰げないのは残念なことです」。帝はふりかえってため息をついた。

張本鮑本喜之作嘉之、陶唐作唐堯、僚作寮、不戴作不得戴。漢明帝の殿閣画に対する讃。
(『隋書』経籍志集総集「画讃」の記述による)ただし、明帝には、仏像の記録と、建武の

名臣の図の記録はあるが、曹植が伏羲以下三十二名以上（全三国文による）の賛を残しているところの絵については、全く記録がない。鳥書については、満城漢墓出土の鳥篆文壺（『満城漢墓発掘報告』（1980・北京）上巻四十三頁以下）を参照。『歴代名画記』『叙画之源流』には「馬后女子、尚願戴君於唐堯」とのみある。『藝文類聚』画所引。『藝文類聚』は末句を「帝顧而笑」と作ったあとに「故夫画所見多矣」と続けている。

晋傅咸画像賦序曰、先有画卞和之像者、以為臧文仲知柳下惠之賢而不與立、卞和自刖以有証、相去遠矣、戲画其像於卞子之旁、特赤其面、以示猶有慙色

晋の傅咸の画像賦の序に言う、先に卞和の像を描いた者があったが、思うに臧文仲が柳下惠が賢者であることを知りながら、ともに朝廷に立つことはなかったのは、この卞和が膝を切られて自らの潔白の証拠としたのとくらべると、その違いは大きい。戯れに彼の像を卞和の隣に描き、特にその顔を赤くかいて、慙じる様子があるのを示した。

他本卞子自作卞和自。『藝文類聚』画所引。ただ「序」の部分は『太平御覧』の引用とは部分が異なる。敝可均は、『藝文類聚』所引の序のあとに『太平御覧』所引の序をつなげて序文を復元している（『全晋文』巻五十一）。なお『藝文類聚』はさらに「梁元帝職貢図贊」「梁元帝謝上画蒙勅褒賞啓」「謝東宮賁陸探微画啓」を載せている。卞和の話は『韓非子』和氏篇。臧文仲の話は『論語』衛靈公。

宋炳山画序曰、豎画三寸、寔当千仞之高、横墨数尺、実体百里之迥

宋の宗炳の山画序に言う、縦画三寸が実に千仞の高さに匹敵し、横線数尺が実に百里の遠さを持っている。

宋炳当作宋宗炳、今訳文従改。鮑本寔作実。『歴代名画記』宗炳の条は「画山水序」として引く。

晋王彪之の詩序曰、余自求致仕、詔累不聽、因扇上有二疎画、作詩一首、以述其美

晋の王彪之の詩序に言う、わたくしは致仕することを望んだのだが、帝は何度もお許しにならなかった。扇の上に疎広と疎受の絵があったので、詩一首を作り、二疎のすばらしさを述べた。

張本鮑本詩序作自序、二疎作二疏。『北堂書鈔』巻百三十四「扇」は「王彪之五言詩序」として引く。二疎の致仕に関しては『漢書』疎広伝（3039）。

（1998.10.31）